

---

# ミナミナミ

鮎雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミナミナミ

### 【Nコード】

N5875Z

### 【作者名】

鮎雅

### 【あらすじ】

「お願いあっち側のナミ、私を助けて！」

水たまりの向こうの世界は、主人公が住む世界とは全く逆、ほとんど同じの鏡の世界。そこでナミが頼まれた事とは？

新感覚回文ファンタジー！とか、自分で言ってみたりする。

「夜見てみるよ」「ええ、是非」

「君、気がつかなかったのかね？」「え？」

「よるみてみるよ」 「ああ」

こんな感じです。

## あっちっちツアー

何気ない日常の中で極まれに起こる怪異——というのは、小説の題材になりやすく、純文学、恋愛、SF、ファンタジー、時にはミステリーにまでその波は広がっている。

狐に恋した女子高生、ある日猫とも犬とも魚ともつかぬ不思議な生き物に「君は選ばれた」だの言われ世界を混沌の闇に包まんがしている魔王と戦う中学生、自分の瞳が逃げたから捕まえてくれと頼まれる探偵。

しかしお忘れなきよう・・・これは全て架空。非現実。桃源郷。フィクション。誰かが考え出した物語なのだ。いくら私達人間がそうあれと神に願っても、そもそも神なんて居るはずが無いのだからそんな事は天地がひっくり返らない限りあり得ない。

私は幼少の頃よりそれが現実になったら面白いな、なんて考えて今日17歳の誕生日を迎える。可笑しいね、口では“そんな事はない”という言いながら頭の中では“そうだったらいいな”なんて考えている。もしかしたら人間は矛盾だらけの生き物なんじゃないか。そんな矛盾を抱えながらも、心内で“あったらいいな”と思っている人間。

それが私、南 ナミなのである。下の名前が何でカタカナなのかは知らない。何でフルネームで回文なのかも知らない。知りたくもない。私はこの名前、というだけで何度かご先祖様を本気で呪おうかと思った事がある。全て計画のみで終わってしまったのだが・・・しかしこの名字にしたご先祖と、この名前にした私の父を私は呪わずにはいられない。許されるならば、何故この名前にしたのかご先祖と父親を今すぐ私の膝元に呼び出して小一時間問いつめたいところだ。それは何故か。この名前のおかげで小学生の頃のあだ名は「回文」だったのだ。そんな四文字の言葉を発するより、ナミと二文

字で呼べばいいものをと何度思った事か・・・

話を戻そう、そう何気ない日常の中で極まれに起こる怪異の話だったか。

物語の始まりは、高確率で何かしら日常生活に“異変”が起きぬ限りその突拍子のない物語に巻き込まれる事はまず無い。(例外として、通行人Aとして登場する事ならあるかもしれないが・・・)

さて、私達人間はそんな予想もしない事態に直面した時に備えて準備などしているだろうか？答えはNOだ。そんな人間が居たとしたらきつとメンタルヘルスか脳内お花畑な人だろう。言っておくが、私はそのような類の人間ではない。

そう。準備なんて出来ないのだ。逆を言えば、予想もしない・・・普通の生活の中で出来た少しの綻び。それに事前に気づく人間がどこに居よう。

どこに、居よう。

「・・・あれ？」

瞬きを繰り返す。もしかしたらもといた所に戻れるんじゃないか、って。しかし残念無念。いくらしばしば瞼を往復させても目薬が恋しくなるだけで、目の前に映る灰色は消えなかった。口はぽけっと開いたまま。今ぽつとピンポン球を私の口に投げたら、見事キャッチしてしんぜよう。

さてさて。これは一体どういう事だ。灰色の住宅街をぽてぽて歩いていただけなのに気がつければ私の周り是一片住宅街。言葉が可笑しいね、言い直そうか。ほとんど一緒、という言葉もあてはまるし全てが全く逆、という言葉もあてはまる。・・・どうしたことかって？そういうならば・・・すべてが鏡なのだ。

そこら中に生えている木々がざわざわと風とともに大合唱した。まるで「お前は誰だ、お前はどこから来た」と私に問いているようだ。

そんなの、こっち聞きたいわ。

不思議摩訶不思議奇妙怪々魑魅魍魎・・・いや若干違うのもあるが、私の頭の中ではそんな漢字達が手を繋いで円を描いてよいさよいさ踊っている。黙りやがれちきしょう。

風がざああ、とコンクリートを滑って走り抜けて行く。その涼しさに、私は何故か奇妙な冷気を覚えた。見ると、私の今来ているセーラー服はずぶ濡れ。脱げている靴にもたっぷり水がたまっている。雨でも降ったのか、とあたりを見回してみるがそんな形跡はなく濡れているのは私自身だけのようだった。・・・あたりを見回して、気づいた。私の隣で、私そっくりの女の子が寝ている。着ている服も全く同じ・・・違う。これも鏡。私は右目下に小さなホクロがあるのだが、この子は左目下だ。ちょうど鏡で同じ位置。うわあ、もしかしてドッペルゲンガーかな？しかし奇妙なこともあるものだ、私の寝顔ってこんな感じなのかな、と私はその女の子をじいっと穴があくほど見つめていると。

「・・・ん」

彼女が、目を覚ました。

「あ、えと、お、おはよ」

いやおはようじゃないでしょう。なんて自分に突っ込みをいれる。だってそれしか思いつかなかったんだもん・・・

「!」

彼女は私を見るなり、大口を開いて驚き飛び上がった。その顔には、笑みが浮かんでいる。そして彼女は次の瞬間、私の手を取ってこういったのだ。

「お願いあっちのナミ、私を助けて!」

声まで同じとは、たまげたものだ。

私の喉が引きつって、頬を一筋の汗が伝った。その頬も、突然の事に思わず動き方を忘れてしまったように引きつっている。

助けて？助けてって言った？この子。今、私に？しかも何、あっちって？ていうかここはどこ？ビククリ？これって訴えた方がいいの？

「助け、る？」

「そう！」

ああ私はもうおしまいのようなのだ。めまいがしてあったら死ぬはずのドッペルゲンガーに助けてとかいわれてる幻覚を見ている。

この時、私は思いもなかった。

この出会いが、私を大きく変える事になるなんて……って言うっておけば物語っぽくなるかな。なんて思ったりしている私であった。

ああ、さっきはいないなんて言ってしまったて申し訳ございません神様。異世界に飛ばすなら、せめて本の一冊や二冊……携帯電話だって、持って行かせて頂いても良かったんじゃない？……そんな願いも天上の神には届かず、その雲は太陽を隠した。東に傾きかけている太陽の光を浴びて、私の目の前に居る彼女の涙がキラキラと輝いている。

## 苦勞も過去か、もうろく

時間を、ほんの三分前に戻そうか。

私は学校からの帰路についていた。やがて、天気予報のとおりぽとぽと雨が降り始め、コンクリートに小さな染みを作った。私はふいと上を見上げると、その視界を水色で覆い隠した。手に持っていた傘をさしたのである。傘に跳ねる水滴は踊るように地面に落ちて、また染みを作る。そうして、ねずみ色だった歩道はやがて黒く染まっっていく、私はその上を靴音高く歩いていた。部活が早く終わった今日。まだ空は明るいの、無機質な街頭の灯がともっているのに、少しだけ違和感を感じる。私の通学路は閑静な住宅街で、しかも今日は雨という事で全くと言っていいほど人が居ない。少しだけ寂しさを感じた私は、鞆から音楽プレーヤーを取り出して、イヤホンを耳に突っ込んだ。面倒くさくしておまかせ再生をしたら、だいぶ前にかなりハマったナンバーが流れ出す。耳を走り抜けて行くギターの疾走感に快感を覚えながら、私はまた足を進めた。・・・進めようとした。ふと、水たまりに目を向けるまでは。

瞬間、私の目は大きく見開かれた。

水たまりには見飽きた自分の顔が映っていた。右のホクロ、ショートヘア、趣味の悪い黒セーラー服。水たまりに映るのは間違いなく、この私南ナミのはず・・・さて、こんな事があり得るだろうか？私はふっと自分の口を確認した。まさか。思った通り、私の唇は私自身の意に背いて勝手に動くんなんて真似はしていない。じゃあ何で・・・何で、水たまりに映っている私の唇は、なにかを叫ぶように動いているんだろう？あいにく私は読唇術など習得していないため、水に映る私が何を叫んでいるのかはわからない。しかし、あえて言っている事をあいいうえおで表すならそうだね・・・。「あ」「う」



「え」「え」かな。そのぐらいの事は、私にだってわかる。そんな事を思っている間にも、水面に映る彼女は叫び続けている。風がざああと吹いて、街路樹の隙間を滑り抜けて行く。その背後からの風に、私の短い髪の毛はふわりと逆立った。うすいセーラー服の生地が包まれた小さな心臓が、痛いくらいに胸を叩いてくる。頬を水滴がつたい落ちる。唇を噛み締めると、その痛みからなのか目にほんの少しだけ涙がたまった。・・・きつと見間違いだ。私疲れているんだよきつと。そう思わなくては、と私は自分自身に叫んだ。見間違いじゃなければ、この状況をどう説明すればいい。それも私の本心なのだろうか。

やがて水面の彼女はガラスを叩くように、水たまりを固く握りしめた拳で水面を叩いて来た。その叩く音こそは出ないが、その衝撃からか水面がかすかに揺らめいているような感じがする。その証拠に、水面には小さな波がいくつも出来、水面に映る彼女の顔が少しだけ揺れた。どういうことだ、何故揺れている。とりあえず、水面に映る彼女が私自身ではないことは確かだ。じゃあ誰だよ。誰なんだよ！「誰なんだよ」と叫ぶも、きつと声は聞こえないだろう。向こうの彼女の声が、私に伝わらないように。このままでは埒があかないと、私は手を伸ばした。何かわかるかもしれない。水たまりに触ってみよう、と。

その瞬間、彼女は微笑んだ。

時は戻って三分後。

・・・そこで、私の記憶は途切れている。しかし私の置かれているこの状況、目の前で涙目になって私の手を痛いほど握るこの子を見れば、その続きも容易に想像出来る。

私はどうやら、あの水たまりの向こうの世界に来てしまったようだ。こちらの世界も変わらずさあさあと心地よい雨音をたてながらコンクリートに染みを作り、街路樹の隙間を風が滑り抜けていった。私

は濡れそぼった髪の毛を振り乱し手を振りほどき、転げ回るように走って背後の水たまりを覗いた。そこから見える世界は、何ら変わらない。ただ少し向こうに、私が少し前までさしていたであろう水色の傘と、音楽プレーヤーが転がっているのがかすかだがわかる。それを見て私の頭にのぼっていた血は一気に下がった。少しだけだけど、冷静になったようだ。私は、振り向いて目の前に居る彼女に、「説明してくれるかな」と優しさを含んだ口調で言う。彼女はにこりと笑って、「どうやら、ここが貴方たちの居た世界じゃないってことは説明しなくてもわかってくれたみたいね。さすが私」と言う。「ちよっと待って、」私は目を見開いて、彼女に問う。「私って、なに。どういう事？」彼女はため息をつきながら、呆れ気味に私に言い放った。「前言撤回。わからないかなあ、平行世界って知ってる？ ようはそういう事だよ。説明すんの面倒くさい」「平行世界・・パラレルワールドってこと？」「そうそう。そうともいう。でね、そのパラレルワールドで私と同じ年で同じ外見で同じ学校に通ってる私が貴方しかいなかったの」「だから私を呼んだの？」「そう。正確に言うと、呼んだっていうより繋げた。かな？」「そんな事はいいの。早く用件を言ってよ」「そうだね、時間もない事だし」そういうって、彼女はまた笑った。

雨が止む気配はない。むしろ、これからもっと酷くなりそうだ。

## お願いがneo

かくして私もこの「水たまりの向こうの世界との干渉」という、何気ない日常の中で極まれに起こる怪異に巻き込まれて一つの物語の主人公となってしまう訳だ。別に、そうなりたいと望んだ訳ではない。それにそうなるってしまうとも思ってた。予想が出来たらどれだけ嬉しかった事だろう。きっといろいろ準備してただろうし、その予想することが出来た未来というのがもし自分の望まぬ未来だったら、そのルートを回避する事が出来ると思う。・・・まあそんな事が出来るのは、恋愛シュミレーションゲームのプレイヤーくらいだ。現実でそんな事が出来たらまさにこの世は思うがまま。何でもやりたい放題じゃないか・・・。おっと、勘違いしないで欲しいが不満を語っている訳ではない。むしろ私は今すぐワクワクしているのだ。その証拠に、頬は嬉しさに紅潮し、小さな心臓はちきれんばかりに動いている。足取りは軽く、思わず鼻歌でも歌ってしまいそう。だってそうでしょう。私は、こんな事が起きないか起きないかとずっと期待してつまらない日々を過ごしていたのだから・・・。

私はあのあと、「もう時間がないから、これ読んで貴方がやる事を把握してね」と一通の手紙を渡された。そして彼女は背後の水たまりに飛び込んで消えていった。「それは、貴方への誕生日プレゼント」と捨て台詞を残して。きっとお約束の「同じ人間が一つの時間枠に居ては行けない」というセオリーのことだろう。一定時間経つとどちらかが消えてしまうのだ。物語にはよくある話。そして彼女も私とほとんど同じ外見だから、私の家で私のふりをしてくれるのだろう。出来れば故障してしまう前に、あの音楽プレーヤーと傘を回収してから家に帰ってほしいものだ。そう思いながら、私はもら

った手紙を開いた。

「拝啓 南 ナミ様」

紛う事なく、これは見飽きた私の字だ。このちまつとした右上がりの字は間違いない。

まるで自分自身が書いた手紙を私自身が読んでいるような錯覚に陥りながら、私は手紙を読む。

「きつとこの手紙を読んでいるという事は、貴方は私の姿を見て驚き、そしてこの世界に来て歓喜した後でしょう。この世界に来た事、そして私の身代わりとなることは貴方への誕生日プレゼントだと思っ  
て下さい」

私はそこまで読んだあと、少しだけ眉を寄せて怪訝な顔をした。“身代わり”？不思議に思いながら、私はその続きに目を通した。

「あ、勘違いしないで下さい。身代わりっていつでも、私の代わりに死んでくれとか、言ってるんじゃないんです。大丈夫ですたぶん死にませんから。それで、きつと頼み事言わずに私は多分そこから居なくなっちゃったんだと思います。この手紙は言えなかった時用に書いているんですから（笑）あ、すみません頼み事を書きますね。その頼み事というのが・・・」

それを見て私は更に歓喜した。魔法！？なにそれマジ楽しそう！・・・おっと、一人喜びしてしまった。手紙の内容は、まさに私が望んでも望み足りないほど望んでいた魔法について書かれていた。要約すると、「17歳の誕生日に、おばあさんからミナミ家に伝わる伝説の魔法を教えてもらうのだが、そのおばあさんが私はあまり好きではない。私はミナミ家で一番魔力が弱いし、魔法も下手。きつと

怒られる。別に私は、伝説の魔法なんて使えなくていい。だからそのおばあさんのもとへ、貴方が行ってくれないか。いや、お願いします行つて下さい」ということだった。天地がひっくり返ろうと、地球が滅びる寸前になろうと絶対に無理だと思っていた魔法が使えなくてもいい、しかも伝説の魔法！と私は本当に喜んだ。顔はずっと笑顔が張り付いたままだ。髪の毛が濡れたままだとか、制服が濡れているだとか関係ない。もう知らない。それより家に帰ってはやくそのおばあさんにあつて魔法を教えてもらいたい！その一心で、私は半ば浮かれ気味に家に帰る道を歩き出した。

そして今に至る。

私は一つ、ミスを犯している事に気がついた。手紙の、「注意！」という欄を読んでいなかったのだ。「鏡だったんだ・・・」見覚えの無い住宅街に、私は立ち尽くしていた。頬を伝って流れ落ちる水滴は、雨なのか涙なのかわからない。幼い頃、大きなショッピングモールで迷子になった感覚だ。私はがさがさと、彼女からもらった手紙を急いで開いた。

「注意！」

私の事だから、浮かれて何も考えず今までと同じように今までの道を辿るでしょう。

馬鹿ですね、鏡なんですよ。注意して下さいね。

しかも私の事だから、こんな注意書きなんて読まないでいつもの道を辿ってしまうでしょう。

馬鹿ですね。本当に馬鹿だ。そういうときは、「ポトポ」と唱えて下さい。多分家に着きます。貴方に、そんな魔力があるのなら、ね。へんな呪文とか言っちゃダメですよ？」

「さすが私・・・」私はぼうぜんと上を向いた。「世界ぼうぜんと

する大会」でもあれば、いまなら優勝出来るだろう。色々思う事はあったが、まずは呪文を唱えてみようか？

「ぼ・・・ポトポ？」

瞬きをする時間もなかった。そんな呪文を唱えたあと、すぐ後。私  
は見覚えのある場所に立っていた。「すごい・・・これが魔法・・・  
！」この感動をどう言い表そう・・・？歓喜、はもうたくさん使っ  
てしまった。嬉しい、いや安っぽすぎる。とにかく、言葉にできな  
い。この感動は、実際に体験してみないとわからないだろう。本当  
にうれし・・・いや、やめておこう。言葉にしてしまうと、感動が  
薄れてしまう。いや、なんだかし・・・。何気ない日常の中で極  
まれに起こる怪異、というのも悪くない。体験してみる分には、そ  
れが悲劇につながっていなければ本当に出くわせば嬉しい事だ。と  
思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5875z/>

---

ミナミナミ

2011年12月21日18時46分発行